

## 健康の消費化が意味すること——リスクをめぐる社会的分断線の存在？（要旨）

弘前学院大学 藤岡真之

本報告では、ますます高まっているようにみえる健康に関する消費を取り上げ、それが、誰によって、どのように受けとめられているかということをも量的データを用いて検討する。これは、健康という個人的なリスクに関わる問題への対処が、社会的な水準でどのような意味を持っているかということをも明らかにするために行う。

日本で健康に関する社会学的な研究が活発化してきたのは2000年頃からである。その過程で問われてきた主要な問題の1つは、人々がメディア上の言説に不安を煽られることで消費が拡大しているのではないかということであった。このような見方は、消費社会研究の文脈でいうとJ.K.ガルブレイスの依存効果論と同型だといえる。

このような見方と異なるものとして、消費社会研究では、脱物質主義化がますます取り上げられるようになってきている。この議論が下敷きにしていく欲求階層論は、人々の生得的な欲求の構造を問題にしているために、人々の自律的な側面を強調する傾向を持っている。健康消費は脱物質主義化と関連をもつと考えられるから、この観点を前提にすると、欲求の他律性を強調する依存効果論のような見方のみによっては健康消費を十分に理解することが困難であるということになる。

以上のような2つの見方の対立を背景にして、本報告では次の2つの問題を検討する。①健康に関する意識や行動は不安と結びついているのか。②健康に関する意識や行動は他者性の消去という心的傾向と結びついているのか。

データの分析によってこれらの問題について明らかになったことを結論的に述べるとおおよそ以下ようになる。すなわち、一方では健康不安を感じずに健康消費を積極的に行っている人々が存在し、他方では健康消費が増大し、健康リスク言説が増大することによって健康不安が高まる人々が存在する。これは、両者の間に健康リスクに対する判断の仕方についてのギャップが存在していることを意味する。そして両者が示す傾向は、いずれも脱物質主義化が進行し、健康消費が拡大することで強まると考えられるため、脱物質主義化の進行はギャップをますます拡大させていくと考えられることになる。つまり、鳥インフルエンザ問題、BSE問題、放射性物質の影響についての問題が社会問題として焦点化されたことが示すように、脱物質主義化は、健康リスクに関する問題をますます社会的に大きな問題として争点化させ、社会的動揺を招きやすくする可能性を持っていると考えられるのである。

このような認識は、リスクの存在が社会的な不安を煽るのか否かという素朴な問いから一歩進んで、不安を感じる者とそうでない者との間に存在するギャップがどのようなものか、どれぐらいの大きさか、ギャップを規定する要因が何か、またギャップの存在がどのような社会的影響をもたらすのかといったことを問うことの重要性を示している。言い方を変えると、リスクに対する対処の仕方の社会的分布を明らかにすることで、リスクに関する社会的境界線がどのように引かれているかということをも明らかにし、それがもたらす社会的影響を理解することが重要だということになる。